

イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第十卷 快感地獄に堕ちたイケメン教師

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 屈辱の朝

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ サイドストーリー 『イケメン教師の受

難 伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報

そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について
「イケメン教師の受難 伝説の水泳大会篇
第十巻 快感地獄に堕ちたイケメン教師」(一
以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫
にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し
た場合を除き、本書の一部、または全部を、
あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファ
イル、ビデオ、テープレコーダー)により複
製、流用、転載、転売することを固く禁じま
す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第
119条などの罰則がありますのでご注意くだ
さい。

■ まえがき

水泳大会の一日目が終わった夜、イケメン教師の三神真琴は校庭の隅にある鉄棒に一糸纏わぬ姿で緊縛放置されていた。

すると、夜の校庭に突然三人組の男達が現れ、彼らはイケメン教師の逞しい裸身を散々弄んだ挙句、肛蕾に振動させたバイブを突き刺したまま去って行く。

バイブは朝までイケメン教師の尻の奥で蠢き続け、真琴はあろうことかその強い刺激によつて幾度となく果て、いつの間にか気を失つてしまっていたのだった。

そうして、屈辱の中で目を覚ました真琴の前に、昨夜真琴を鉄棒に緊縛放置した当事者である、担任するクラスの生徒達がやって来る。

「先生、露出プレイを満喫したか（笑）」

「校庭に素っ裸で放置されて刺激的だったでしょ（笑）」

「どうせなら、もうちょつと裸でいてもいい

ぞ（笑）「
彼らはそうやって担任教師を嘲笑い、その裸
身を眺めた。
真琴は彼らに對しどうしようもない憤りを
覚えながらも、この屈辱の放置プレイから逃
れるために、彼らに救いを求める。
しかし、彼らは真琴のそんな願いを容赦な
く打ち砕き、担任教師の尻の奥にバイブが突
き刺さっている事に気づくと、充電の切れた
それを引き抜き、クラス生徒の一人が鞆に
忍ばせていた新たなバイブを代わりに突き刺
し、電源を入れた。
「ああっ、止めてくれ・・・ああっ」
肛蕾の奥でバイブが激しく蠢き出すと、真琴
は尻を振り乱しながら必死に許しを乞うた。
生徒達はそんな担任教師の姿に半ば呆れ果
てた様子で、真琴を鉄棒に緊縛放置したまま
教室へと去って行く。
再び朝の校庭に一人きりとなり、快感地獄
に喘ぐ真琴。すると暫くして、体育の授業を

受け
るた
め
に大
勢の
体操
着姿
の生
徒達
が校
庭に
現れ
・
・
・
。

■ 第一章 屈辱の朝

夜の校庭に再び一人きりになったイケメン教師の三神真琴は、校庭の隅にある鉄棒に両手を緊縛されたまま、下半身を淫らに揺らし、
ていた。
尻の方から聞こえる鈍いモーター音が静寂に包まれた校庭に生々しく響き渡り、真琴は未知なる快感の渦へ呑み込まれようとしていた。
さつき突然目の前に現れた担任するクラス
の男子生徒、相葉の兄、祐介は、素っ裸のイケメン教師のイチモツや尻の穴を散々弄んだ後、その剥き出しの尻の穴にバイブを突き刺し、リモコンのスイッチを入れたまま夜の校庭から去って行ったのだった。
リモコンは真琴の脚元の傍に投げ捨てられ、
祐介の話では朝までその充電は切れることな
くバイブは振動し続けるようだった。
このまま朝まで尻の奥でバイブが振動し続

なければ一体どうなってしまうのか、それを思
うと真琴はどうしようもない恐怖に襲われ、
必死に尻を振り乱し、突き刺さったバイブを
振り払おうとした。
しかし、祐介達によって尻の穴の深部まで
突き刺されたそれは全く尻から落ちることな
く、激しく振動しながら真琴を快感責めにし
続けた。
「ああっ、ああっ」
真琴の半開きになった口元からは絶え間なく
オスの喘ぎ声が漏れ、イチモツは硬く膨らみ
夜空に向かって勢い良く反り立っていた。
このままじゃ本当にイッてしまいかも知れ
ない・・。真琴は未知なる快感の波に溺れ
ながらふとそんな予感を覚えていた。尻の穴
を侵されて射精するなど、教師としてだけで
なく、一人の男としても恥ずべきことだと真
琴は思った。もしも、そんな事になれば自分
は人として失格であり、生徒達が嘲笑うよう
なド変態教師だと認めざるを得なかった。

なんと少しでも耐えるんだ・・。真琴は唇を噛みしめながら自分にそう何度も言い聞かせ、快感に抗った。しかし、未開発の尻の穴は初めて味わう強い刺激によつて、瞬く魔に開拓され、真琴を底なしの快感地獄に引き込んでいった。

「ああああっ」

真琴の大きな喘ぎ声が夜の校庭に響き渡り、真琴はついに下半身を激しく振り乱しながらイチモツから白濁の汁を発射したのだった。

次の瞬間、真琴はグッタリと項垂れ、暫し快感の余韻に浸った。しかしその間もバイブは尻の奥で激しく振動し続け、新たな快感の波が真琴に襲い掛かろうとしていた。

程なくして、バイブの振動によつて快感の余韻から覚めた真琴は、再び尻を振り乱し悶え始めた。

「あああっ」

今、射精したばかりだというのに、真琴は激しく悶え狂い、尻を襲う快感に悶え狂った。

そうして、真琴は誰もいない夜の校庭で尻
の穴に突き刺さったバイブの振動に喘ぎ続け
幾度となく射精することになった。何度も果
てる間に、真琴は尻の穴を侵されるのがこれ
ほどまでに気持ち良い事なのかとだんだん思
い始め、いつしか何とも淫らな恍惚とした表
情を浮かべるようになっていた。

真琴がふと目を開けると、空はいつの間に
か明るくなり、校庭が朝焼けに照らされてい
た。鉄棒に緊縛されたままの体はずっしりと
重く、体全体を倦怠感が覆っているのが分か
った。僕は一体・・・。すっかり記憶が飛ん
でしまっていた真琴は、昨夜から自分の身に
起きた出来事を必死に思い出そうとした。
そして、尻の穴に何か異物が突き刺さって
いる感覚を覚えた真琴は、ようやく自分が尻
にバイブを埋め込まれ快感に溺れている間に
気を失ってしまったのだと気づいた。

バイブはリモコンの充電が切れてしまった

の か も う 振 動 は 治 ま り 、 尻 の 穴 奥 深 く に ひ つ
そ り と 突 き 刺 さ っ て い た 。 さ ら に 真 琴 が 脚 元
に 目 を 向 け る と 、 そ こ に は 自 ら が 放 っ た 大 量
の 白 濁 の 汁 が 飛 び 散 り 、 独 特 の 臭 い を 放 っ て
い る の が 分 か っ た 。
真 琴 は 尻 の 穴 を バ イ ブ で 弄 ら れ て こ れ ほ ど
ま で に 乱 れ 狂 っ て し ま っ た 自 分 が 、 情 け な く
惨 め に 思 え て 仕 方 な か っ た 。
や が て 、 空 は ど ん ど ん 明 る く な り 、 真 琴 の
目 の 前 に 校 庭 の 風 景 が は っ き り と 現 れ た 。 き
っ と も う す ぐ 、 生 徒 達 が 登 校 し て く る に 違 い
な い ・ ・ 。 そ う 思 う と 、 真 琴 は 急 に ど う し
よ う も な い 焦 り を 覚 え 、 緊 縛 さ れ た 体 を 解 こ
う と 体 を 懸 命 に 揺 ら し た 。
し か し 、 き つ く 縛 ら れ た 両 手 は や は り ど う
に も な ら ず 、 諦 め た 真 琴 は ガ ッ ク リ と 項 垂 れ
生 徒 達 が こ こ へ や っ て 来 る の を た だ じ っ と 待
っ し か な か っ た 。 昨 夜 、 自 分 を こ こ に 緊 縛 放
置 し た 相 葉 達 が 一 番 先 に や っ て 来 て 、 鉄 棒 に
縛 り つ け た ロ ー プ を 解 い て く れ る な ら 、 他 の

生徒や同僚教師達には一晩校庭に全裸で放置されたことを知られずに済むが、もし彼ら以外、生徒や同僚教師がここへ先に現れたなら、
たちまち学校中に自分の屈辱の放置プレイが知れ渡り、ますます学園の奴隷に成り下がってしまいう恐れがあった。
頼むから早く来てくれ……。真琴は明るくなつていく空の下、相葉達が誰よりも先にここに現れることを願った。
そうして一時間以上が過ぎた頃だった。遠くの方から生徒達の話し音が聞こえ、その声は校庭の隅に緊縛されている真琴の方に近づいてくるのが分かった。
……。真琴は体を硬直させたまま近づいてくる声に聞き耳を立てた。その声は少なくとも同僚教師のものではなく、生徒達の声であることは分かっていたが、自分の担任するクラスの生徒達であるかはまだ分からなかった。
而して、話し声がすぐ傍で聞こえた次の瞬間

間、「オッス！」と呼び掛ける男子生徒の大
きな声が聞こえた。
「あぁっ」
驚き慌てる真琴の前に現れたのは、クラス委
員の相葉をはじめとする担任するクラスの生
徒達だった。
「先生、露出プレイを満喫したかへ笑」
「校庭に素っ裸で放置されて刺激的だったで
しょへ笑」
「どうせなら、もうちょつと裸でいてもいい
ぞへ笑」
相葉達はそう言って笑いながら、昨夜緊縛し
た時のままの姿のイケメン教師を眺めた。
真琴は羞恥に体を震わせながらも、少しホ
ッとしていた。なぜなら、これで相葉達に緊
縛された両手を解いてももらえれば、他の生徒
や同僚教師達に一晚校庭に全裸で放置された
事を知られずに済むのだ。
「もういいだろ、早く両手を解いてくれない
か」

真琴は相葉達に向かって落ち着いた声で訴えた。
「先生、その前にこれ何だよ？一杯ミルクが飛び散ってるじゃん」
相葉は真琴の脚元を指差し、呆れた声で呼び掛けた。
一緒にいるクラスメート達も担任教師の脚元の異変に気づくと、同じように呆れた声を漏らした。
「これは・・・」
真琴は必死に弁明しようとしたが、何と説明すれば良いか分からず、恥ずかしそうに俯いた。
「アレ？尻の穴に何か刺さっているぞ！」
イケメン教師の引き締まった尻を眺めていた男子生徒がそう驚きの声を上げると、すぐにその場にいます全員が真琴の背後に回り、左右の尻肉を手で広げて尻の穴に刺さったモノを確かめた。
「うわっ、すげえモノが入ってるぜ！」

「もしかしで、そこに落ちているのはコレの
リモコンなんじゃねー」
地面に落ちているリモコンを見つけた生徒が
それを拾い上げると、皆、昨夜イケメン教師
の身に何が起きたのか一瞬で悟ったようだっ
た。
その時、クラス委員の相葉は、昨夜自分の
兄が校庭に放置されたイケメン教師を見てく
ると言つて家を出て行ったのを思い出して、担
任教師の尻の穴にバイブを突き刺したのは兄
に違いないと確信していた。
而して、相葉はバイブのリモコンを受け取
ると、その充電が切れているのに気づき、不
敵な笑みを浮かべた。自分達が夕べ鉄棒に緊
縛放置したイケメン教師は、その後兄たちに
悪戯され、きつとバイブで尻を開発されたの
だ。
相葉は兄の犯した悪戯に感心しつつ、自分
も同じようにこの担任教師の尻を徹底的に開
発してやろうと企んだ。

「アレ持っているか？」
相葉は傍にいた友人にそう尋ね、友人が鞆に忍ばせていたリモバイを受け取った。
「先生、ケツの穴をもっと気持ち良くさせてやるぜ（笑）」
相葉はそう言って不敵に微笑みかけると、真琴の尻の穴に埋まったバイブを取り出し、友人から受け取ったバイブを新たに突き刺していった。
「あああっ」
真琴はオスの呻き声を上げて体を仰け反らせた。
「良い声で鳴きな」
相葉がそう言ってリモコンのスイッチを入れると、真琴は尻を激しく振り乱して悶え狂い始めたのだった。

■ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 連載小説『イケメン教師の受難伝説
の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか
各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『イケメン教師の受難 伝説の運動会篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195>

・ ・ ・ 二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドルの存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罾に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罨に嵌められ大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事ランプリを受賞した春輝はセレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることになった

り・・・。
後日、早速授業中の大教室で撮影をするこ
とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命
じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏
わぬ姿でポーズを披露する。
そうして撮影はだんだんエスカレートして
いき、イケメン学生は授業中の大教室だけで
なく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄
を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。かつてはやかたつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられたかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。